

養護学校の就労体験実習における報告行動を可能にする
生徒個人の言語状況に合わせた環境設定

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
飯田 智子

現在養護学校では、就職を目指し、一般企業などに一定期間通勤して与えられた作業に従事するという就労体験実習が行われている。その中で養護学校から生徒に与えられている課題が、実習報告であった。ところが、多くの生徒が感想程度の記述報告にとどまり、作業についての記録が殆どない為、反省・目標立てなどを生徒自身が行う事が難しい状況であった。

この研究は、報告書のレイアウトを生徒個人の言語状況に合わせて変えていくことで、記述報告において自己観察記録や自己評価を可能にするという、記述報告行動支援の般化を検討することを目的とした。

対象は発達障害を持つ養護学校生徒3名であった。標的行動は実習で与えられた業務に関する報告（自己観察記録・自己評価）であった。まず記入機会を設定し、報告を受ける聞き手を配置した。独立変数として、記述欄（事例1）、報告シート（事例2）、評価シート（事例3）を用いた。これらの独立変数は、各生徒の言語行動の状況を調査し行動観察を行った上でそれぞれ設定し、報告場面で提示することによって、記述状況が変化した。

本研究における支援方法は、記入機会の設定や、強化を与える聞き手の配置、報告書のレイアウトを工夫したものを提示する（独立変数）というものであり、様々な場面に応用が可能であると言えた。つまり生徒の家庭生活や学校生活、様々な実習先など、場面を問わず般化の可能性を持つ方法であった。また、全ての対象生徒において、記述等に関して特別な訓練は必要なかったことから、生徒にとって負担の少ない支援方法であったと言えた。さらに、事例3では、評価の一致率が向上したことによって、実験者は生徒を認める・褒めるといった行動が増えるようになった。このように対象生徒の行動が変化しただけでなく、周囲にいる支援者の行動も変化したことから、レイアウトを工夫して提示する方法は、積極的な強化機会を作ることに繋がる方法であったと言えた。

今後の課題として、対象生徒の行動記録に加えて支援者の行動記録も行い、分析する事により、支援者の強化機会を積極的に作る方法の検討が挙げられた。